

本学教員の授業実践に学ぶ

巻頭言

教育学部長・教育推進室長 白石 裕



FD 研修会の持ち方は大学によってさまざまであるが、本学では、本学教員の授業実践の事例を基に、そして教職員全員の参加を原則として、相互に学ぶ機会を設けている（そのため本学ではFD 研修会ではなく、FD・SD 研修会という）。教員の授業実践の事例を取り上げるのは、まずは本学教員の授業実践に学ぶのではないかと狙いによるものである。非常勤講師を含めて私自身のいくつかの大学教員としての経験からしても、本学教員の授業への取り組みや授業の密度の濃さは、数多くある大学のなかでも上位に位置するものではないかと思う。本学学生の授業評価が全体としてきわめて高いのも、各教員の卓越した授業実践に依るところが大きいといって過言ではないであろう。そこでFD 研修会を外部の講師に頼る前に、まず自分たちのすぐれた実践に目を向けようということになったのである。

授業実践の事例として研修会で報告されたのが、平成23年度は森岡周教授の講演であり、平成24年度は北田善三教授と島恒夫教授の授業の紹介と授業分析をした西端律子教授の報告である。その内容については次頁以降の石川裕之助教の説明にあるとおりであるが、出席者の声にみられるように、これらの報告から本学のFDの発展に資する多くの示唆が得られたのではないかと思う。そのなかで私にとってとりわけ興味深かったのは、北田教授と島教授の授業が森岡教授のいう脳科学の知見に即したものとなっているということである。だとすれば、効果的な授業を行うには脳の機能に着目した人間の身体性を考慮したものでなければならないことになる。

授業スキルの向上を科学的理論的な裏付けをもったものとして解明していくこと、そうしたことが大事ではないかと思わせる両年度の研修会であったと思う。

< C O N T E N T S >

特集 1	2011 年度 FD 研修会	森岡先生の講演とグループ討議	2
特集 2	2012 年度 FD 研修会	西端先生の授業分析報告	5
研究授業レポート			
	「管理運営学」理学療法学科	庄本康治 (2011.6.21)	7
	「在宅看護論」看護医療学科	河野由美 (2011.6.17)	8
	「救急医学」看護医療学科	神戸美輪子 (2011.7.1)	8
	「栄養教育論」健康栄養学科	喜多雅子 (2011.6.30)	9
	「インテリアデザイン」人間環境デザイン学科	加藤新喜 (2011.6.20)	10
	「保育の心理学」現代教育学科	三好環 (2011.6.24)	10
	「運動系理学療法学実習」理学療法学科	瓜谷大輔 (2011.11.29)	11
	「微生物学実験」健康栄養学科	北田善三 (2011.12.1)	12
	「ユニバーサルデザイン」人間環境デザイン学科	中山順 (2011.11.30)	12
	「人格心理学」現代教育学科	中城進 (2011.12.15)	13
	「理学療法評価学演習」理学療法学科	松尾篤 (2012.7.16)	13
	「診療過程援助技術」看護医療学科	林有学 (2012.7.13)	14
	「臨床栄養学実習Ⅱ」健康栄養学科	林京子 (2013.1.29)	14
	「構造力学Ⅰ」人間環境デザイン学科	三井田康記 (2013.1.17)	15
	「教育社会学」現代教育学科	石川 裕之 (2013.1.22)	16

2011年度 FD・SD 研修会

2011年9月15日(木)に開催された教育推進準備室(現教育推進室)主催「2011年 FD・SD 研修会」では、「学生の学びを保証するためにどのような取り組みが可能か」という大きなテーマについて模索していく第一歩として、2011年度の研修会では「講義型授業における学生参加について考えてみよう」というテーマを設定し、森岡周先生(理学療法学科)にご自身の実践事例を「学びの促進—講義型授業から—」というタイトルで紹介いただきました。

実践事例報告「学びの促進—講義型授業から—」 実践報告 森岡先生

森岡先生がご担当されている授業は、ほとんどが講義型授業です。しかし学生の私語はゼロ、居眠りもほとんどないとのこと。その理由は、学生の「情動」や「感動」を喚起させることを最も大切にしていることが関係しているのではないかとのことでした。

適度な「緊張感」を大切にす

「恐怖」「怒り」「嫌悪」「悲しみ」「驚き」「幸福」の6つは世界共通の感情といわれています。森岡先生がこの中でも重要視しているものは、ネガティブな感情の「恐怖」だそうです。ただし、恐怖を与えるといっても何か打撃的なことをするわけではなく、緊張感のある授業を構成するという意味でおっしゃっているとのことでした。具体的には、資料に何もかも全部書いてあれば学生の注意は資料の方にいきますし、一方で授業者の話していることが全く分からなければ、学生の緊張感は落ちていきます。そこで、すべての答えは教えないけれど授業に来ないと問題は解決できない、さらに問題解決のカギがいつ出てくるか分からない、といったようにされているそうです。これを通じて学生に緊張感や切迫感を持たせ、授業に対する学生の注意を引き出しておられるそうです。この適度な緊張感が学生の私語をなくし、授業に対する集中度を高めているのだと思われます。

学生の「驚き」を喚起する情報をちりばめる

一方で先生は、学生の緊張感があまり長く続かないよう



森岡周先生

報告：石川 裕之

にも配慮されています。緊張感を持たせることは、学生に負荷をかけることにもなります。そうした負荷が10~15分続いた後は、必ずポジティブな感情が起こるように授業を構成されているそうです。そのポジティブな感情の例が「驚き」や「幸福」といったものです。「驚き」の感情については、大学の授業に対する高校と変わらないのではないかとという学生の先入観を初めの授業で取り払ったり、「人間の神経細胞が最も多い時期は実は胎児の時である」といったような学生の常識をひっくり返す内容を提示したりされるそうです。そうした驚きの感情を喚起する情報が授業の中にちりばめられていれば、学生の注意というものはある程度引き出すことができるとのことです。

「幸福」の感情に働きかけ、授業者への興味を促す

次にポジティブな感情のうち「幸福」の感情については、やはり笑顔、中でも微笑みが重要な要素になってくるということです。私たちは誰も人の笑顔を見ると心地よく感じるものです。これは実は脳のミラーニューロンが関係しているようで、親しみを感じている人の笑顔を見ると、自分も心の中で自然に笑ってしまうのだそうです。先生はこの反応を意識して、口は笑わずとも目は笑って学生を見つめてあげる、常に周りを見渡し学生の表情に注意する、といったことを心がけているそうです。そうすることで、できるだけ学生が授業者に興味を持ってくれるよう働きかけているのです。それが結果的に、私語が起こらなかったり、居眠りする学生がいなくなったりといったことにつながっているのではないかとのことでした。

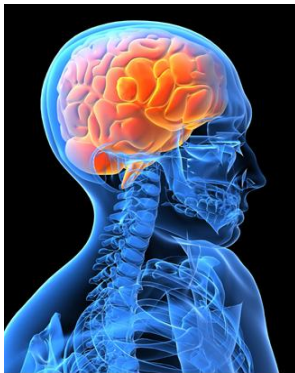
授業に「期待」させ、確実に「報酬」を与えること

学生の学ぶ意欲を引き出すにはどうすればよいか。授業者ならば誰もが抱える悩みだと思います。森岡先生はこの点について、学生に「期待」を持たせることが重要だとおっしゃいます。脳科学的には、「ドーパミン」という物質が人間のやる気に関わっているそうです。このドーパミンは、何かに期待することで興奮するそうです。したがって授業中に学生のやる気、すなわち学ぶ意欲を引き出すためにはドーパミンを興奮させることが必要で、そのためにはまず

授業に期待してもらうことが重要になるということでした。そこで森岡先生は1～2回目の授業で必ず、「この授業に期待してくださいね」と学生に話されるそうです。しかもその期待に対して確実に報酬として与えていくことが大切とのことでした。授業をきちんと聴いたので自分の期待が叶えられたとか、目標を達成できたといった体験を学生に繰り返させることで、期待すれば必ず何らかの報酬が得られるという正の効果を与えることができるそうです。逆に、期待していたにも関わらず授業を聞いても何も得られなかったとなると負の効果が生じてしまい、人間の脳細胞は反応しなくなるそうです。そうするとやる気がなくなって、無力感を学習させる典型になってしまいます。学生にとって目標が高すぎると負の効果を生み出す原因にもなってしまいうので、時には目標を低く見積もるといことも必要になってくるとのことでした。

人間の注意力は10～15分しか持続しない

学生の授業への参加や集中を引き出す前提として、人間の注意力の持続は10～15分しか持たないことに注意しなければならぬそうです。これは、人間は同じ感覚を与え続けられると注意力が低下してしまうためということです。そこで森岡先生は、授業で話が長くなった時には映像を交えてみたり、いったん授業を中断して授業内容について友達と話し合う時間を設けたりすることで、意図的に学生に



違う感覚を使わせ、リラックスさせることを心がけていらっしゃるそうです。学生の感覚を変えるにはその他にも、アクションやジェスチャーを大きくする、声に抑揚をつける、話のテンポを変えたりメリハリをつけるといったことも効果的だそうです。

重要部分を繰り返し話すことで記憶に定着させる

森岡先生は、学生の授業内容への理解を促すにはまず学生の感情を動かすことが重要だと指摘されます。先生ご自身、とにかく重要な部分については授業中繰り返し話をされるそうです。そうすることでその内容を記憶の中に定着させるのです。また、「今話したことと、さっき話したことの違いをみつけてください」というように学生自身に内容を識別させることも理解の促進につながるそうです。また、先生は脳に関することを説明する際にたびたび比喩表現を使われるそうです。脳に関する知識は専門的で学生にとっては難解です。そこで、脳を社会、細胞を人間に置き換えるなど、比喩を用いて学生の想像をふくらませるのだそう

です。専門知識などをできるだけ学生に身近な比喩に置き換えることができるように、日頃からテレビを観たりして情報を収集しているとのことでした。

森岡先生の授業に関するお話の中には、講義型授業において学生の学びを促すためのエッセンスやノウハウがふんだんに含まれていると思います。その先生が最後に強調していたのは、「借り物でない、自分らしい授業を！」ということでした。大学には教員の横の連携が必要です。様々なスタイルの教員がいて、それぞれの教員のスタイルに合った学生がその下で学ぶということが、大学教育のあり方として大切なのではないかということをおっしゃっていました。学生の学びを促すための講義スタイルを自ら確立され、日々実践されている先生だからこそ、とても説得力のあるお言葉でした。

<グループワーク>

森岡先生の実践事例紹介の後は参加者によるグループワークをおこないました。グループワークでは参加者がA～Fまでの6つの班に分かれ、指定されたテーマについて議論しました。そして、グループ発表と全体討論を通じてグループワークで見出された知見を参加者全員で共有しました。以下は各班の報告を要約したものです。

テーマ1：「学ぶ意欲を引き出す工夫」

<A班>

グループワークを通じて、学生の学ぶ意欲を引き出すポイントの存在に気づいた。それは、①学生との信頼関係を築く、②授業のスタイルを工夫する、③期待の誘導、④刺激の変化、の4つである。まず、学生との信頼関係を築くに当たっては、学生の名前を憶える、出身高校など学生個人の情報を授業外の立ち話などを通じて得ていく、毎回授業の最後に学生にコメントを書かせ、それにコメントをつけて返却するなど有効であるとの意見が出た。

授業スタイルの工夫については、学生の理解度を確かめることで教員と学生の間にある知識や専門性のギャップを把握し、それを埋めていくことが大切である。そのために、授業前にアンケートをとって、学生がどの辺りの内容について不安に思っているのかを把握している先生もいれば、小テストで単にその回の授業の知識を問うのではなく、以前の復習を兼ねた内容を出すという取り組みをされている先生もいる。

期待の誘導については、その日の授業で身につけた知識に対して学生自身が自覚できることが大切である。そのため、授業の目標を学生にとって身近で具体的なものにすることが必要で、たとえば「この授業の内容は国試で出るよ」、「この授業をしっかりと理解していないと2回生になって困るよ」などの呼びかけをすることで、学生の授業に

対する期待を引き出している先生もいる。

刺激の変化については、身振りを大きくしたり立ち位置を変える、板書をする、グループワークなどを挟むことで、授業者への注目を促すことができる。また、私語がうるさく注意する際なども「そこ、うるさいよ！」と叱りつけるのではなく、「何を話しているのかな？」と聞いてみるなど、アプローチを変えることも学生の注意を引きつけるのに有効である。

学生の学ぶ意欲を引き出す授業の基盤は、学生に対する愛情を持った行動である。

<B班>

「そもそも教員と学生の間には『学ぶ意欲』というものに対する捉え方が異なるのではないか」という疑問が出され、「それでは『学ぶ意欲』とは一体何か?」ということについて議論した。まず1つめに、「学ぶ意欲」に対する教員と学生との認識の乖離について。教員が学生だった頃には、自分の知らないことや難解な事象が世の中にたくさん存在することに感動し、興味を覚え、学ぶ意欲が沸いた。しかし現在、学生から聞こえてくる要望は、自分たちに分かる講義をしてほしい、すぐに役に立つものを教えてほしいといったことで、こうした条件が満たされないと学ぶ意欲が失われてしまう。つまり教員側は自分の学生時代の経験から、分からないことや難しいことを目の前にすれば学生は学ぶ意欲を引き出されると考えている。一方の学生側は、分かることや役に立つことを目の前にすれば自分の学ぶ意欲が引き出されると考えているのではないか。

2つめに、講義のあり方について。教員としては1回1回の講義が真剣勝負と考えて臨みたい。しかし現実として、講義資料をアップしたり、メールで質問を受け付けるなど学生の便宜も図らねばならない。しかしそうすると学生は講義資料さえ手に入れば満足してしまう。このように今の大学や教員は、学生にとっての利便性を高めるほど、実際の授業での学生の学ぶ意欲が低下してしまうというジレンマを抱えている。

3つめに、役に立つ科目とは何かについて。カリキュラムに組み込まれている以上、すべての科目が学生にとって役立つものであるはず。しかし学生の側には厳然と、役に立つ科目とそうでない科目の区別がある。当然、後者に対する学ぶ意欲は低くなる。そうした科目がそれぞれの学生が目指す将来像と結びつかないことが、「役に立たない」とみなされる原因になっているのではないか。

テーマ2:「授業参加を促す工夫」

<C班>

現在の学習指導要領では生涯学習力が重視されており、本来大学生にもなれば自ら学ぶ力がついていなければおかしいはず。それではなぜ主体的に学ぶことができないか。これについては、学生自身が本当に学びたいことと、学べ

ることとの間にギャップが存在していることが一因となっているのではないか。こうしたギャップが生じる背景には、高校までの学びのあり方や、不本意入学の問題、卒業後に想定される職業と学生自身の適性とのミスマッチなどの存在が考えられる。そうしたミスマッチを抱える学生に対しては、適切な評価を通じてできるだけ早くそのことに気づかせてあげることが、学生の幸せや自己実現のためには必要なことではないか。

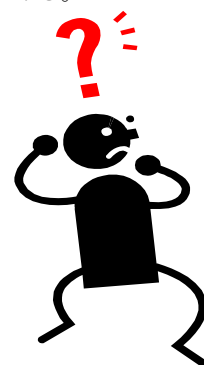
次に講義型授業における学生参加とはそもそも何であるか。大量の情報を効率よく伝達するのが講義型授業の本来の目的である。しかし森岡先生の授業のように、授業内容に学生が興味を持ち、きちんとついてきたなら、それはやはり学生の授業参加といえるのではないか。学生が興味を引き出され、おいてけぼりにされない授業、そうした授業は講義型授業でも授業参加を実現しているといえる。

授業におけるコミュニケーションについて。学生に自らの意見を述べさせることも授業参加を促す手段としてあり得るだろう。しかしそれは、その授業における時間的制限の中で学生に伝えるべきものとのバランスの中で考えられるべきであろう。あえて授業中にはすべての事項を教えないということも大切である。学生の頭の中に疑問や問いが残り、それが授業への興味や参加を促すことになるのではないか。自力で問題を発見し、学んでいく力をつけることが大学教育の最終目標である。教え方を改善することで学生に学ばせていこうという道だけが、大学教育として唯一よいものであるかどうかは検討の余地があるだろう。

<D班>

外山滋比古の言葉に「グライダー型から飛行機型へ」というものがある。グライダー型人間は詰め込んだ知識だけで飛んでいく。それに対して飛行機型人間はエンジンを積んでいて、自力で方向や高度を変えて飛んでいく。大学は飛行機型の人間を作るべきである。

学生の授業参加を促すには、授業の中で「個」を揺り動かすことが何より大切である。感動を与え、刺激を与える。そうすれば講義型授業でも個は活性化される。教員も同様にそれぞれ個性ある授業をすべきである。すぐに役立つ、すぐに使える授業であれば学生は聞いてくれるものである。個を揺り動かすには、学生をどんどん褒めることも必要である。



テーマ3:「授業内容に対する理解を促す工夫」

<E班>

基礎の授業と応用の授業では、学生の理解を促す工夫が異なる。応用では考えさせる、気づかせることが重要であるが、基礎では専門用語が増えるので丸暗記してもらわざるを得ない部分

もある。その際には、学生を授業に集中させる、興味・意欲を沸かせるための工夫が必要であり、様々なメディアを活用したり、森岡先生の話にも出ていたように、有形・無形の報酬を与えるなども有効な手段である。ただし、誰かのものまねでは授業はうまくいかなかいだろう。同僚の話などを参考にしつつも、それぞれの教員が自分の授業を組み立てるための具体案を考えていくことが重要である。

<F班>

授業内容に対する学生の理解を促すには、学生が関心・意欲を持てる部分から授業を見直し、学生の身近なことに近づけ、そこから始めることが大切である。たとえば、まよめの時間を設けたり演習・実習と連携させることで、学生自身に学びの手応えを与えることが必要となる。学生は教員と同じではないことを前提にして、学生をどう育てていくかを考えることが重要である。学生の理解を促すには、授業の内容や方法をどう組織化していくかがカギとなるだろう。

全体討論

グループワークの終了後は、参加者全員による全体討論をおこないました。そこでは参加者の間から以下のようなご意見が出ました。

「最近は何となく教員が資料を学生に配ったりウェブにアップしたりして、いつでも学生が見ることができるようにしている。これは授業を全く聞いていなくても、さらに

いけば出席すらしていなくても授業の内容を知ることができるということ。それでは大学の授業とは一体何なのか。確かに教育の環境は整ってきた。しかし長い目で見ると、それは学生にとっていいことなのか疑問を感じることもある。少し不便にする、少し厳しくする、少し自分で考えさせるといったことも、学生に自ら学ぶ力をつけさせるためには必要なことなのかも知れない。「グループワークの報告を聞いていて、学生が持っている職業イメージと個々の授業とのつながりについて考えさせられた。確かに入試広報などで示されている人材像と各学部・学科が実際に育てている人材の間にはギャップがあるのかも知れない。全学的に討議をして、こうしたギャップを埋めていくことの必要性を感じた」。

以上、多くの教職員の方々が参加され、お互いの意見と経験を共有することで、本学のローカリティに根ざした研修会となったのではないかと思います。森岡先生が提示されたご自身の授業のエッセンスに対して共感を表明されたり、実際に同じようなことを実践されていたりといった先生方が少なくなかったことも、今後、本学における「よい授業」の構成要素とは何かを考えていく上で印象的でした。その一方で、授業観や学生観についてはそれぞれの先生が固有の部分を持っておられることも分かり、そうした多様性の存在もまた、本学の大学としての底力を示すものではないかと感じました。(文責：石川)

特集 2

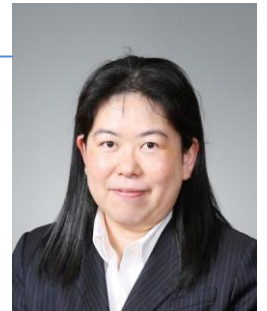
2012年度 FD 研修会

2012年9月13日(木)に本学で開催された教育推進室主催「2012年度 FD 研修会」について報告します。

2012年度の研修会では新たな課題として授業の分析に取り組み、その成果を教職員全体で共有することを目指しました。本学で実際におこなわれている身近な授業を分析してみようという今回の企画ですが、北田善三先生(健康栄養学科)、島恒生先生(現代教育学科)にご協力いただき、両先生の授業について西端律子先生(現代教育学科)に「授業改善を進めるために―授業分析から見えてくるもの―」というタイトルで分析・ご報告していただきました。

授業分析の目的と方法について

報告：石川 裕之



西端 律子 先生

研修会では、最初に西端先生から授業分析の目的と方法についてご説明がありました。授業分析という取り組みは、初・中等教育において30年以上前からおこなわれているものだそうです。授業分析では、いわゆる「授業がうまい先生」の何がうまいのだろうということ、ビデオカメラ等の機材やインタビュー等の手法も駆使しつつ、しっかりと分析し理解していきます。分析の目は授業者の目線や、児童生徒の応答にまで及ぶそうです。そうして抽出した「授業がうまい先生」のスキルを誰もが共有できるようにするのが、授業分析の最終目的ということでした。

今回西端先生は、北田先生と島先生の授業をビデオカメラで撮影し、それを分析されました。それだけでなく、授業者の先生へのインタビューに加え、受講していた学生にもインタビューを敢行されたそうです。西端先生の報告は、まず北田先生の授業のビデオを参加者全員で視聴し、その後には参加者同士が小グループに分かれ、授業の特徴について話し合い、グループ内で出た意見を代表者に発表していただいて会場全体で共有するという形式で進められました。身近な同僚の授業とはいえ、普段なかなか他人の授業を目にする機会が少ないこともあり、どの参加者も真剣な眼差しで授業ビデオに見入っていました。

北田善三先生の授業（4回生、国試対策授業）

まずビデオを観た参加者からの感想としては、「板書に流れがあり、見やすい」、「板書をうまく活用して学生の注意を引き出している」、「学生を1人だけ当てるのではなく、2人組で当てて答えやすくしている」、「身近な話題で学生を引きつけている」といったものが挙がっていました。

西端先生の分析によると北田先生の授業には、「先生ご自身の健康診断結果の実物を持ってきて学生に興味を持たせる」、「ノートテイクしやすい」、「教科書の図よりも詳しく



説明をする」、「個々の学生に対応している」、感想にも出ていたように「1人ではなく2人で学生に考えさせている」といったエッセンスが見られたそうです。またビデオには出ていませんでしたが、「国試に出るよ」「過去にはこんな出題があったよ」と強調することで学生の緊張感を高めたり、授業開始10分前にはすでに先生が教室でスタンバイしているといった配慮もなされていたとのことでした。

一方で学生から見た北田先生の授業の特徴としては、雑談を交えるなど眠くならない工夫をしている、板書は早いが分かりやすい、名前を憶えて声をかけてくれる、表情に親しみがある、授業が始まる前から廊下にて声をかけてくれるといったことが挙げられたそうです。特に後者3つなどは、「よい授業」を成り立たせるに当たって教える内容以外の要因の大切さを物語っているとの西端先生の分析でした。ちなみに北田先生はご自身の授業を受けている4回生全員（88人）の名前を憶えていらっしゃるそうです。

島恒夫先生の授業（3回生、小学校免許必修授業）

島先生の授業を観た参加者の感想としては、「机間巡視の動線が複雑である」、「先生の話し方などが、学生が発言しやすい空間を作り出している」、「しばしば授業者は独りよがりになりがちだが、島先生の場合は学生の気持ちをしっ



かりつかんで授業を進めている」、「学生の理解を確かめながら授業を進めている」、「学生の顔と名前が一致しており、学生が油断できなさそう」、「グループで話し合わせており、学生同士で道徳についての考えを交換できるのがよい」、「質問を通じて、学生が何をどう考えていけばよいかを導いている」、「北田先生にも通じるが、学生がゆったり考える時間を設けている。その一方で突然当てるので、学生には適度な緊張と弛緩が与えられている」などが挙がっていました。

西端先生の分析によると島先生の授業には、感想にも出ていたように「学生の名前と顔をすべて一致させている」、「ジェスチャーや話術で学生が答えやすくしている」、「個人での解決が難しい質問については学生同士で話し合わせている」、「話し合いに参加していない学生に対しても先生が声をかけることで授業に引き込んでいる」といったエッセンスが見られたそうです。さらには、毎週宿題プリントを出して授業の最初にコメントをつけて返却する、1コマの授業でほぼすべての学生を当てる、授業開始5分前には教室に入っているといった工夫もされているとのことでした。

学生から見た島先生の授業の特徴としては、「質問に対する明確な答えがない場合が多いので話し合いが必要な授業になっている。それゆえ自分の考えを深めたり他人の意見を聞いたりする」、「授業前の小ネタや授業に参加していない学生の引き込み方などが、自分が将来学級経営する際の参考になる」、「顔と名前を憶えられているのでサボれない」、「早くから先生が教室でスタンバイしているので心構えができる」、「1コマの授業でほとんど当てられる」といったことが挙げられたそうです。先生の狙いが学生にもきちんと伝わっており、それがうまく効果を現しているように感じました。

両先生が心がけられていること

両先生の授業に対する参加者からの感想が述べられた後、それぞれの先生からコメントをいただきました。そこでは両先生が授業において心がけていることについて触れられていました。まず、北田先生が心がけていることとしては、「分かりやすく話をする」、「学生に五感を使わせる」、「公平に扱う」、「学生を褒める」、「いわゆる『試験座り』(1つ席を空けて座らせる)をさせて私語をなくす」といったことが挙げられていました。また最後に、「学生に熱意を持って当たる」ことを最も心がけていることとして挙げられていました。これは我々教育に携わる者が共通して心がけるべきものかも知れません。

一方、島先生が心がけていることとしては、第一に「学生がどうすれば理解できるか、という学生の立場から授業のあり方を考える」ということが挙げられていました。まず学生がどうすれば理解できるかという点からスタートして、次に、そのために授業者は何をすべきかを考えるという視点は、授業改善のためにとっても大切なものではないかと感じました。さらに、「学生と1対1で向き合う」ということも挙げられていました。島先生も学生の名前をほとんど憶えていらっしゃるようですが、名前を憶えるのも学生と1対1で向き合うためとのことでした。

「よい授業」の共通点とその活用法

西端先生の分析によると、両先生の授業には、「学生の顔と名前をしっかりと憶えている」、「授業開始の時間になる前

から教室でスタンバイしている」、「分かりやすい板書やグループワークの導入など各所に工夫がこらされている」といった共通点があるとのことでした。さらに付け加えるなら、北田先生も島先生も学生に適度な緊張と弛緩を与えたり、学生に五感を使わせるといった点などは、昨年度の研修会で報告された森岡先生の実践事例にも通じる点があるように感じました。やはり「よい授業」には分野に関わらず、何らかの共通したエッセンスが含まれているものなのでしょう。

ただし、西端先生が報告の最後におっしゃっていたように、こうしたエッセンスをすべての先生がすべての授業で取り入れなければいけないということではないと思います。そしてやはり西端先生が報告の中でご指摘されていたように、それぞれの教員が自らの授業について「このエッセンスについては必要かな」と思った場合に、必要なものを取り入れていくことが重要ではないでしょうか。それでこそ、「借り物でない、自分らしい授業」、「個性ある授業」、「自分の授業」といったものを作り出していけるように感じます。

本学には、まだまだ本学ならではの「よい授業」がたくさん存在していると思います。今回の授業分析のような取り組みを通じて、今後も「よい授業」の発掘とそのエッセンスの分析・蓄積を全学的に推し進めていくことが必要だと感じます。そして、それらのエッセンスの塊の中から、お一人お一人の先生方が自らの「個性ある授業」にさらに磨きをかけるために役立つ材料を見つけ、活用していただくことで、本学の教育力は向上していくのではないかと思います。(文責：石川)

研究授業レポート

「管理運営学」

理学療法学科

庄本 康治

「管理運営学」は専門科目の中の「基礎理学療法学」に位置づけられ、開講時期は3回生前期になります。到達目標は、様々な管理運営学の基礎的理論を理解し、今後のリーダーとして活躍していくためにどのような事を考え、行動しなければいけないかを自分なりに考察可能にすることとしています。

ところで、学生時代に私自身が受けた「管理運営学」の講義の印象は、物品の管理、診療報酬の管理、人事、教育などだけであり、退屈きわまりない印象しか持っていませ

んでした。数年前から自分の専門分野と全く関係ないこの講義を引き受けなければならぬ状況になったのですが、色々な工夫をしています。

講義の内容としては、管理運営学を学ぶ目的、古典的管理論からDruckerの理論、人的資源管理論、専門的分野に関係の深いリスク管理、教育方法としてのコーチングなどについて講義します。特にDruckerの理



論は最近、映画や書籍でも有名になっていて、興味を持っている学生も多いです。様々な分野での管理運営について話をしますが、皇帝がどのように国を治めるべきかについて書いた「貞観政要」、類似した「韓非子」、その他の古典なども出来る限り紹介し、学生に意見を問うスタイルで実施するようにしています。時事問題、様々な業界の話も多く含みますが、一線で働かれている人のインタビュー、ビデオなども含むように心がけています。学生同士でも議論し合う場面も設定していて、なかなか盛り上がりますが、

「在宅看護論」

看護医療学科

河野 由美

今回私が実施した研究授業は、看護医療学科3年生必修科目の「在宅看護論」で、92名が受講しています。在宅看護は、看護教育のカリキュラムの中でも新しい分野として統合領域に位置づけられ、専門科目で習得した知識を統合させることが求められます。従来の医療モデルではなく生活モデルの考え方が重視され、対象の価値観を尊重した質の高い生活を支えることが在宅看護には必要となります。そのためには医学的知識のみならず、社会資源や社会保障制度、法律など様々な知識はもちろんのこと、全人的（身体・心理・社会・霊的）・総合的に対象（本人・家族）をアセスメントし、その人の個別性にあった質の高いケアを提供することが求められます。しかし、3年生でこの「在宅看護論」を学ぶまでは、在宅看護に関する知識・イメージを全く持ち合わせていない学生が大半です。また中には、在宅看護を、医療レベルの低い簡単なものと思っている学生もいます。ですが、先にも述べたように、在宅看護では、実は非常に高度な知識・対人援助技術、アセスメント能力を習得する事が求められます。対象の個別性に合わせた応用力が求められる難しさはありますが、人をケアする醍醐味が在宅看護にはあります。一方で、生活経験が乏しく、障がいや疾病のない学生に、限られた講義時間の中で「生活を支える」とは、「QOLを高める」ためのケアとは、を考えさせる困難さにいつも突き当たっています。なるべく

かなりの時間が必要になり、講義時間との関係で十分に確保できているとは考えていません。優秀なリーダーになるにはこれらの理論はもちろんのこと、自分自身を鍛えていくことが重要ですが、先達のリーダーたちがどのように、自分自身を鍛えていったのかについても紹介、議論しています。これらの内容と建学の精神との関係性についても学生と一緒に考えながら実施しています。

まだまだ講義内容、方法とも未完成であり、今後も工夫しながら実施していこうと考えています。

学生には具体的な事例を提示しながら、少しでも在宅看護をイメージでき、興味をもってもらえるように心がけています。私は、学生が一番深く、多くのことを学べるのは臨地実習と考え、実習での導入となるように講義内容を工夫しています。

在宅看護論の大きなキーワードとしては「生活」と「家族」の2つがあります。前回・今回・次回の3回の講義では、その「家族」に関して理解を深められることを講義のねらいとしました。前回の講義では家族とは何か、学生はあらためて問われることで、家族の概念が人によって異なることに気づきます。そして今回の講義では、学生は自分の持つ家族像を人にもあてはめ、家族を理解する上で知らず知らずにバイアスがかかっており、時にはそれが援助の障害になることに気づきます。そして次回の講義では家族をとらえるための家族理論と家族アセスメント、家族支援の必要性を順次理解できるように講義計画を立てています。

講義を実施するたびに、反省の毎日ですが、V目にもかかわらず熱心に聴講してくれる学生の姿を見ると、少しでも興味深い・学びの多い講義が行えるように自分自身を叱咤激励している状況です。最後に、私がどの講義においても常に心がけていることは、学生一人一人の名前と顔を覚え、できるだけ講義中は名前を指名して、双方向の講義が行えるようにしていることです。



「救急医学」

看護医療学科

神戸 美輪子

「救急医学」は、現代教育学科と理学療法学科の2学科で選択科目として開講されています。急性期看護学の林田先生と私で担当し、心肺蘇生や創傷の手当などの演習を一部いれながら講義を進めています。「医学」と名のつく科目

ですが、医学そのものを理解することを目的にはしていません。私たちが日常生活で遭遇するかもしれない緊急時に、「by stander（緊急時にそばに居合わせた人）」として、状況を判断する力、そして悪化を防いで速やかに回復につなげる力、すなわち「何をすべきなのか、何をしてはいけないのか」を理解して頂きたいと思っています。その上で、理学療法学科では、病院の中で出会うさまざまな患者さんが理解できるよう、また現代教育学科では将来、子どもの生命や健康を守ることができるようという願いを持ち進め

ています。

今回の研究授業は理学療法学科の講義で「急性中毒」でした。授業の導入部分では最近起こった薬物中毒事件やサリン事件などを提示し、胃洗浄のモデル実演や、タバコ 110 番の自動音声、DVD を使って興味を引き出そうと試みましたが、今年度受講している理学療法学科の学生さんにとっては（私語はないし、寝ることもないけど）、淡々としたつまらない 90 分になってしまったような気がします。講義は教員と学生のコミュニケーションの場で、双方で作り上げていくものですから、本当に恥ずかしい限りです。

研究授業は看護医療学科 6 人の先生が出席され、後日 10 人の先生で授業研究会を開催して頂きました。そこで興味を持っているかどうかわからない学生の反応をどう引き出せばよいのか、引き付ける授業はどうしたら出来るのか、について意見を頂きました。講義だけでなく学生自身の発表を取り入れる、演習を多くする、現場の見学などを取り入れるなど、他の先生方からそれぞれの科目で工夫されていることが具体的に出されました。ただ、科目担当をして

3 年目になります。毎年、の受講人数がかなり違って

いて、発表や学外見学の予定が立てにくい、また演習も実習室が空いておらず教員間で項目調整しないと使用できないなど、さまざまな問題があります。学生はきちんと聞いているのでいい授業だったという意見も頂きましたが、理学療法学科が求めている救急医学がどんなものなのか、学科の先生方と話し合う余地もあるのではないかと本質的な意見も出されました。

毎日の授業等に追われる中、基本を忘れて突っ走ったような気がします。お忙しい中、研究授業・授業研究会にご出席頂いた先生方に感謝申し上げます。



「栄養教育論Ⅱ」

健康栄養学科

喜多 雅子

栄養教育論Ⅱの教育目的は、栄養教育論Ⅰで学んだ理論を実際のライフステージ別や傷病者の栄養教育にいかにか活かしていくかを学び、対象者の行動変容を促し、対象者の学習を支援できるようになることです。

教育方法としては、テキストの解説が主ではありますが、科目の特性上、基礎栄養学や応用栄養学、臨床栄養学、食品学といった科目群との関連が強く、他の科目と関連付けて記憶しておいてもらうために、すでに習ったであろう事を質問するという事も実施しております。この方法は、学生の私語抑制・眠気覚ましにも有効ようです。

内容としては、実践力を育成するために実際に使用されている教育媒体の提示や体験、栄養教育を実施するうえでの法的根拠の概説を取り入れております。また、管理栄養士国家試験科目でもあることから、国家試験の出題傾向に対応して詳説するだけでなく、国家試験問題を小テストで実施し、国家試験合格を意識した教育内容となっております。

本時では、ライフステージの中でも高齢者に対する栄養教育がテーマでした。導入として高齢者の生理的・心理的

変化に関して、学生に質問しつつ、整理まとめをし、その後、これを受けて栄養教育の実例を説明という予定だったのですが、臨地実習前にもかかわらず、学生が介護

保険制度の栄養ケアマネジメント書式について見たことがないとい

うことだったので、栄養改善システムの流れ、対象者の判定基準、実際の書式の解説に切り替えました。そして、症例について説明しながら、栄養ケア計画の記入例を示し、各自オリジナルのケア計画のレポート提出を求めました。

また、教育媒体作成の際、高齢者は白内障・緑内障の影響で媒体の文字の大きさや色使いに注意が必要なのですが、これまで他大学の講義では説明しても理解されませんでした。幸いなことに本学では高齢者体験スーツを多数保有していることから、その中の高齢者に近い視野・視力になるゴーグルをつけてもらい、カラーや文字のポイント数を変えたシートを見ることを体験してもらった結果、ようやく実感できたようでした。講義の中で体験を入れると、時間を超過したり、体験したことを自由にしゃべりだすので、元の静寂な状態に戻るのが大変なときもありますが、その時、その場で感じさせることで講義の理解度を高めたいと考えています。

授業研究会では、声の大きさ、滑舌、板書に関しては評価をいただきましたが、ビデオを見る限り最後列の学生にはやや聞こえにくい、見えにくいと思いました。また、今回の教育内容は栄養教育とは言いがたいのではとの意見をいただきました。私自身が各科目の教育内容を十分に把握出来ていないことや本学ではマネジメントに関する科目が



ないことから、栄養教育の枠を超え、教育内容を盛り込んでしまうのですが、実務教育関係科目を担当されている先生方と内容調整を図り、卒業後即戦力となりうる学生の教

育に寄与していきたいと考えておりますので、ご教示のほどお願いいたします。

「インテリアデザイン」

人間環境デザイン学科 加藤 信喜

この授業を受けてインテリアデザインが全てわかる、とはいきません。受講対象者が人間環境デザイン学科の2回生ということもありまだまだ専門的知識も少ないため、まずはインテリアデザインに興味をもってもらい、楽しさを感じながらインテリアの基本知識を学ぶことを目標にしています。「知をみがく」までは程遠く、私にできることはインテリアデザインという名の「知」の扉を開け、そのエントランスホールの手前まで導く事程度でしょうか。中(インテリア)にまで入ってくれるのかどうかは正に生徒個人の意志にかかっているわけです。こう言ってしまうとちゃんと教えてないのでは、とお叱りの声が聞こえてきそうですが、力不足と認識はしておりますが毎回丁寧に「思い」を伝えたいと考えています。しかしながら、ハーバード白熱教室とは合いならず、あっちで居眠りこっちでおしゃべりということが多くみられます。幸い今回の研究授業ではビデオ撮影が入り、後方には数名の先生方が控えておられたお陰か、いつもより私の三次元集団催眠術?が効かなかったように感じました。本当は寝ている子を起こす程の迫力ある授業をしたいのですが、なかなかうまくいきません。

最初は全員点呼から始めます。ひとりひとりの顔を見て名前を読みあげることになっている理由には2つあります。60名も受講していますのでそれだけで時間がかかってしまうのですが、生徒ひとりひとりと向き合う姿勢を保ちたいと思っているのが1つです。つまり生徒個人と私が直接つながっていることを大事にしたいのです。もう1つはできるだけ生徒の顔と名前を覚えるよう努力しようと考えているからです。実際は記憶力の衰えで覚えきれないのですが・・・ただ、この方法が良いのか悪いのかわかりません。さまざまな授業があり、色々な方法があります。そんな多様性が生徒の飛躍する可能性につながるのではと考えています。

ところで大学の授業時間は1コマ1時間半ですが私には少々長すぎるような気が



がします。(誰が決めたのでしょうか?東大?)人間が集中できる時間はせいぜい1時間程度ではないでしょうか。そこで残った30分をどうするのが問題です。今回はモダンデザイン中期<ミッドセンチュリーモダン>の時代をリードしたデザイナー・イームズの珠玉の名作映画「パワーオブテン」と「ケーススタディーハウス」を冒頭で見てもらうことにしました。各々約10分程度の短い映像ですが刺激になったのではないのでしょうか。私はどういふわけかかなりオメダタイ性格のようで、自分が感動したことは他人も絶対感動するに違いないという無垢な心情といえは聞こえはいいのですがそんな能天気さを持っているようです。したがって30分は比較的自由に関連する映像を見てもらうことが多いです。

次に、テキスト(指定図書「インテリアデザイン」建帛社)にそって講義を進めます。今回の項目は「開口部と建具」、10ページくらいの範囲です。私自身の設計した開口部の図面資料を配布し、実践的な考え方、処理の方法等を説明し補足しました。デザインという行為は知識だけでは成り立たず、実際に設計しスケッチを描きモノづくりをして初めて完成型となるのです。机上の勉強が実は現場につながっていることを伝えたいと思いました。

はっきり言って下手な授業と自覚していますが、それでも自分が経験し勉強したことを精一杯教えることができると考えています。遠州茶道宗家13世家元・小堀宗実氏は「教えることは、学ぶこと」とおっしゃっています。自ら学び続けないと教えることはできないということと理解し、肝に銘じたいと思います。

「保育の心理学」

現代教育学科 三好 環

「保育の心理学A」は1回生の保育士資格の必修科目です。この科目では、発達していこうとする子どもの姿や子

どもの発達に関わる心理学的な基礎を学び、子どもへの理解を深めることを目標としています。特に生涯発達の観点から、保育との関連の中で、どのような姿勢で子どもの前に立ち、どのように子どもと関わるかを考えさせながら子どもに対する理解を深めることを目指しています。単に子どもが好きだからという思いから出発した学生たちであっても、卒業後は保育の専門家として子どもや保護者・地域

のニーズにこたえながら人々と関わっていく力が求められており、学生たちは様々な科目や実習を通してその力を4年間で醸成していくのですが、その取り掛かりの専門科目の一つとして基礎を理解させたいと考えています。

しかし、1回生前期の科目であり、学生にとっては大学の授業に少しずつ慣れていく時期に当たるため、出来るだけ平易に、保育に関わる発達心理学の基礎を伝えることを目指して、学生の理解を確認しながらややゆっくりと進めているところです。

参加型の授業を展開したいと思いつつも人数の多さと教授すべき内容の多さにより、それを果たせていませんので、毎回の講義の終わりに振り返りシート(ミニツッパパー)を書かせています。ほとんどの学生はよくわかったと答えています。この部分がわかりにくかったという学生に対しては翌回の授業の冒頭に時間を取って簡単に復習をして答えています。しかし、授業中にきちんと理解できている学生は、復習は役に立つとしながらも、その時間が長くなるともどかしい思いをすることがあるようで、学生の理解力の差をどうフォローするかが課題です。授業内容の発展的な質問する学生に対しては、さらに詳しい内容について

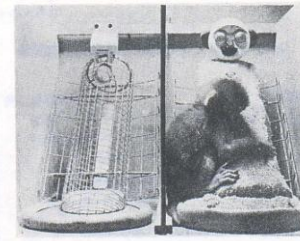
も答えています。

教室では空き席があまりないほどに学生が着席しており、朝から授業が詰まっています。

朝から授業が詰まっています。疲れの出る4限目ということもあって、授業担当者から見ると、良く集中して受講している(一部は?だが)と思える時と、疲れからか集中度が少なく思える時とがあります。写真や短時間の映像ビデオを見せると関心を引き付けることができるのですが、写真は取り込めても、毎回ぴったりな動画を見せることができず、折々に使う程度です。学生の視点からはどのような授業なのだろうか、といつも気になりつつ授業を展開しています。

研究授業にご出席くださった先生には、授業後の研究会で大変貴重なご意見を頂きました。具体的で私自身の今後の授業にとっても参考になるご意見や評価を頂き、感謝しております。今後の授業展開に生かしたいと存じます。

④針金製代理母親(左)と布製代理母親(右)(Harlow, 1958)



*針金製代理母親授乳群の赤毛ザルも、布製代理母親のもとで長く過ごした。

「運動系理学療法学実習」

理学療法学科

瓜谷 大輔

運動系理学療法学実習は高取先生と2名で担当させていただいています。内容は整形外科疾患患者に対する検査測定や治療の実技練習を中心としています。

この授業は最初の2回のみ運動器理学療法の基礎的な内容を2名の教員が2クラス合同で指導します。それ以降は各教員が専門とする内容を中心に分担して5回の授業を計画し、教員1名で1クラスの学生を指導します。5回の授業が終了すると担当クラスを入れ替えてもう一方のクラスを指導します。実習授業は原則的に1クラスあたり教員1名になるように主担当と補助担当の2名の教員で担当しておりますが、各教員の教育者あるいは理学療法士としてのバックボーンや経験の違いから、教員間での指導の標準化の困難さを感じる事が特に実習授業においてあります。その結果授業が必ずしも1教員あたり1クラスの濃さになっていないように感じる事があります。その点、各教員の担当内容を確認・整理し、1教員が1クラスずつ担当することで実技指導をきめ細かくできるようになったと感じます。最後の数回では実際に何らかの症状を有する学生を学生数名ずつで検査・測定、評価し、問題点とその解決方法を立案してもらいます。

医療技術はサイエンスでありアートであると言われる。直接ヒトの体に触れることで局所の動きや質感を感じ取り、



自分の得た感触が正常なのか異常なのかを判断しなくてはなりません。授業では最初に私が説明しながらデモンストレーションを行い、実技練習ではできる限り一人一人の手を取って直接感触を経験してもらえるように心がけています。できるだけ多くのヒトに触れることで個々の違いを感じてもらえるようにも心がけています。しかし経験の少ない学生たちにとって理屈は理解できても、我々の伝えたい「感覚」を理解してもらうことは容易ではなく、限られた時間の中で感触をつかんでももらうためにどのように経験を積ませるかが課題といえます。

同じ内容の授業を2回行うため、1クラス目の授業で気づいた問題点について2クラス目で修正することができる一方で、クラスごとに同じ内容でも伝え方に差ができてしまうことがあります。それが結果的に不公平にならないように注意しないといけないと感じておりますが、いまだ克服できていない課題であります。また技術の伝達だけでなく、なぜその検査や治療を選択するのかといった思考ができるように指導していきたいと考えています。

「微生物学実験」

健康栄養学科

北田 善三

昨年は、腸管出血性大腸菌による食中毒が世間をにぎわし、生牛レバーが食べられなくなるかも知れないとマスコミが大騒ぎする事態に至りました。厚生労働省のまとめによると食中毒により年間 25,000 人前後の患者が発生していますが、実情はその何倍もの発生があると推測されます。本学科の学生は、卒業後多くが食品関連の仕事に従事することになりますが、そういった仕事でもっとも気をつけなければならないのが食中毒です。

本実験では、細菌を扱う上での基本的な技術から、食品中、環境中の細菌測定といった応用技術を身に付けさせることを目的としています。実験を通して心懸けていることは、まず授業に興味を持たせること、微生物を意識させること、微生物に関する知識・技術を身に付けさせることです。興味を持たせるという意味では、飲料水、牛乳、食品中の細菌、ヒトの常在菌、室内環境中の細菌など身近なものを取り上げています。また、微生物を意識させる意味では、顕微鏡で細菌を観察したり、細菌の存在を発色や発蛍光で確認するなど視覚に訴えた内容も取り入れています。知識・技術を身に付けさせるという意味では、微生物検査の基本である培地作りから、各種培地の取り扱いを経験し、さらに油断すれば常に細菌に汚染される可能性があること

などを学ばせています。

「百聞は一見に如かず」という諺があるように、講義で何度も話



すより実験で一度経験の方が学生の覚えも早いことから、講義の肉付けや、国家試験対策としても活用し

ています。そのためにあまり多くのメニューを盛り込まず、重要な箇所の説明は繰り返し、また全員が参加できるようにと心懸けています。

その結果、回を重ねるにつれてレポートの書き方も上手くなってきており、いつも読むのが楽しみです。一方的に話すことの多い講義と違い、学生と対話しながら進めることの出来る実験は学生との距離を縮めるのに好都合であり、学生との信頼関係が生まれ、それ以降の指導にも大いに活かされます。

授業の基本は知識・技能を身に付けることですが、そのためには学生の内発的モチベーションを高めることが必要です。レポートに実験が楽しいとか、興味が湧いてきたとか、理解できたとかポジティブな文言が書かれていれば必ず肯定し、ほめるコメントを書くようにしています。頑張れば認めてあげるといった随伴性の認知により学生が一層実験に興味を持ってくれればと考えています。

「ユニバーサルデザイン」

人間環境デザイン学科

中山 順

研究授業科目は「ユニバーサルデザイン」を取り上げました。本授業は、ユニバーサルデザインの考え方を指導し、それを実践できるようにすることを狙いとしています。様々なユーザーにとって、どうすれば「わかりやすく」「動きやすく」「気持ちよく」使える物や環境になるのかを、できるだけ具体的に指導するようにしています。そのために、講義方式と演習方式を織り交ぜて授業を行っています。内容的には、高齢者や障害者に配慮した物や環境をデザインするために欠くことのできない要素は何なのか？それらの配慮すべき要素に基づいてどのように具体化すれば、ユニバーサルデザインといえるものになるのか？ということについて解説しています。そして、今回は、9回目の授業として心理面の配慮すべき要素について講義方式で解説しました。

講義方式で説明する時は、パワーポイントが中心になります。その理由は、話だけではユニバーサルデザインの説

明をわかりやすくすることは難しいからです。できるだけ視覚的に絵を自分で描



いたもので説明します。写真も多く使います。パワーポイントを使うと、講師の一方的な話になってしまう弊害があるかも知れませんが、私は、講義内容をわかりやすくするための有効手段として重宝しています。ですので、1回の授業で使うパワーポイントの枚数は結構多いと思います。ただ、今回の授業は普段より多過ぎたため、時間が足りなくなり焦りました。

この研究授業では時間がなく演習を実施できませんでしたが、演習として練習問題を学生に与えてその解答を提示させることも行っています。例えば、高齢者に配慮された物のデザインの分析をするために、商品の配慮点を書いた紙を学生自身が黒板に貼って、学生と一緒にグルーピング分析をすることもあります。とにかく、演習の場合は学生

と一体になって考えるようなスタイルにしたいと思っています。でも、実際はそう思うようにいかず、結局、用意した答えになるように誘導しているのが実情です。

以上のように、自分では面白い授業になるようにしているつもりですが、如何せん、授業中に喋る学生や眠る学生

はいます。まだまだ、工夫や努力が足りないようです。後から今回の研究授業の映像を見て、自分の授業能力の低さを痛感しました。今後はもっと学生に面白いと思ってもらえる授業ができるよう努力したいと思いますので、ご指導いただけますようお願いいたします。

「人格心理学」

現代教育学科

中城 進

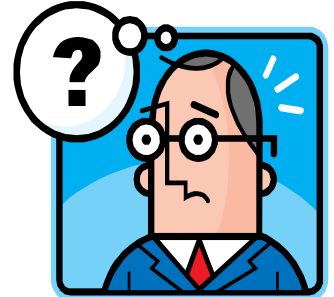
『人格心理学』は、本学教育学部においては選択科目ではあるのだが、認定心理士資格取得のための科目の1つでもある。認定心理士資格を取得希望の学生が受講に来る。また、教養科目での「人格」についての章が面白かったと感じた学生も履修している。講義の到達目標としては、人格心理学における知識や技術についての基本的理解である。本講義では、受講生が自身の人格の成熟を行ないながら人生を充実させて過ごすことができるようになるために、「人格」を理解し、人格研究の方法を学び、また様々な人格理論を学修することである。講義の内容としては、上記に如くに認定心理士資格取得のための科目ということもあって、認定を受けることのできる内容を意識している。講義概要は、類型論や特性論の接近法、精神分析的接近法、現象学的接近法、行動主義的接近法、発達課題論的接近法、人格と生得的特質の関係、人格と自己の関係性、人格と人間関係、人格とコミュニケーション、人格と職業適性の関係、人格の障害などを学修している。

研究授業当日は、「人格と人間関係」というテーマで、「何故に、人間は他者を好きになるのであろうか」を問題意識として、対人魅力の諸々の条件を考察した。

Byrne, D.(1965)らの実験や Heider, F.(1958)のバラ

ンス理論や交換理論を通して類似説を考察した。Winch, R.F.の相補説も考察した。「一般的な好ましさ」説も Anderson, N.H.ら(1968)の研究を紹介した。さらに、松井豊らの研究(1983)を通して「魅力ある異性の印象・人柄」や「魅力のある異性のパターン」も考察した。

授業では、各研究の紹介を中心とした資料を作成して、配布している。図表を使用しながら口頭で分かり易く説明している。ある程度まで理解できて後に、配布された資料を読むことを求めている。学生に対して次から次へと疑問も提示している。疑問を有すると、もっと学びたいという学習動機が高まると言われているからである。今後、疑問や質問の出し方の工夫を探求したい。また、興味が湧き辛いテーマをどうしたらよいかを思案中である。



「理学療法評価学演習」

理学療法学科

松尾 篤

この講義では、理学療法における検査・測定技術のひとつである関節可動域測定を実技・演習を通して学びます。理学療法学科の学生にとっては、入学後はじめて理学療法における専門的技術を習得し、はじめて実技試験を経験する機会になります。座学で学び、知識を詰め込み、試験で答案を埋めていく作業の繰り返しでは獲得できない専門的スキルを学びます。他者の身体に触れ、他者の身体を動かす、それを感じながら、プロフェッショナルの「手」に近づくための第一歩になります。

講義の目標は、健常者(学生同士)で滞りなく、滑らかに、しなやかに、全身の関節可動域の測定を実施できることとしています。そのために、特に私が強調し、意識して

いることは「型」を作ることです。臨床の現場における検査の場面では、他者

の身体に触れ、専門的な知識を応用しながら、安全かつ正確に、効率良く理学療法技術を発揮しなければなりません。そのためには、自由で個性的な技術応用の方法を推奨するよりも、一定の「型」をまずは身体に染み込ませることが大切だと考えております。そんなわけでこの演習授業では、指導、練習、指導、練習を繰り返します。山本五十六の名言、「やってみせ、言って聞かせて、させてみせ、褒めてやらねば、人は動かじ」の精神です。徹底的に「型」を作ることを前提に反復練習する機会を多く作ります。さらに実技試験を実施することで、精神的な緊張感やタイムプレッシャーを与えた状況下で正確な検査が実施できるかを評



価しています。また、毎回、実技練習をするパートナーをランダムに変更し、どのような体型や体格の対象者でも正確な検査が実施できるよう配慮しています。教員は私を含めて2名で担当し、時には数名の先輩が演習に参加して学生同士、先輩後輩の関係で練習の方法やヒントを共有していく場面を設けています。

教育の成果は、試験や単位数だけでは測定できません。

「診療過程援助技術」

看護医療学科

林 有学

「診療過程援助技術」では、健康上の問題を有する対象の診療過程とその過程における看護活動の役割を理解するとともに、診療に伴う援助技術の内容・方法を理解し、安全・安楽に実施できる技術を習得することを目標としています。

本科目で取り上げる看護技術は、看護業務に定められる「療養上の世話」と「診療の補助」のうち后者の「診療の補助」であり、医師が行う医行為に対する相対的医行為（医師の指示により看護師の知識・技術で行い得る医行為）にあたります。身体の侵襲を伴う技術であり、誤った方法で行えば患者の生命に悪影響を及ぼしかねない性質の技術で、医師の指示の下に行うことが条件とはいえ、最終的に実施する看護師の責任は重大です。そのような意味から確実な技術を習得することは当然ですが、手技や手順を覚え、その通りに実行するのではなく、根拠に基づく安全な技術でなければなりません。

今回の授業は、「採血」の技術を学ぶ回でした。この単元では、採血の方法を理解し、学生間またはシミュレーターで安全に採血が実施できることを目標としています。また、本科目の最後に学ぶ技術であり、前回までに「注射の技術」として筋肉内・皮下注射と点滴静脈内注射をシミュレーターを用いて実施しており、学んだことをいかしながら段階的に技術を学習できるようにしています。解剖学的知識に基づいて注射部位を選定すること、注射器や針を無菌的に扱うこと、実際に針を刺すなど、学生にとっては技術的に難しく、さらに精神的な緊張を強いられる技術です。その

10年先、20年先、30年先の未来に、学生達が背中を伸ばして立派な社会人として、意気揚々と活き活きと人生を謳歌していることが何より最高のアウトカムと考えています。学生に今、何を語り、何を与え、何を伝えるかは、その時々で、様々な文脈で変化します。しかしながら、常に変わらず続けなければならないことは、情理を尽くして語り続けることだと私は信じて授業をしています。

ためにも段階的に学べるようにし、演習では複数の教員が少人数のグループを担当するようにしています。



授業の流れは、解剖学的知識については前回の授業で小テストで確認していますが、冒頭のレクチャー部分で再度知識を確認し、デモンストレーション、技術練習とすすめています。その後、教員による技術の確認をした後、実際に採血を実施する計画になっています。

技術は「できる」≠「教えられる」というように、すばらしく上手にできる人が必ずしも上手に教えることができるとはいえません。教えることを前提にして技術を再度学び直すことが必要と実感しています。つまり、学生と同じようにできない状態になって、あらためてどうすればいいのかを意識的に確認しなければならないと感じています。デモンストレーションでは、ひとつひとつの動作を重要な部分は特にコマ送りのようにしながら説明するようにしています。昔に比べ生活体験が乏しく、手先の器用さに欠ける学生が多い中、左右の手を別々にどう動かせばよいのか、指をどう使えばうまく注射器を操作できるのか、「できる」人が当たり前に行っている動作は学生にとっては非常に難しいようです。

学生が「できる」ことを支援し、患者さんが安心して学生の援助を受けてもらえるよう、また、援助を実施することを通して学生が看護にやりがいを感じてもらえるよう努力したいと思っています。

「臨床栄養学実習Ⅱ」

健康栄養学科

林 京子

臨床栄養学とは、様々な疾患、病態の成因、進展、治療に栄養学がどのように関わっているかを追求する学問で

ある。臨床栄養学は、おのおのの疾患、病態に対して適切な栄養管理(栄養マネジメント)を行うことを目的としている。そのためには、傷病者の心身について十分に理解を深めておくとともに、本学では、臨床栄養学Ⅰでは各疾患の病態の概要について、臨床栄養学Ⅱでは医療に従事する者としての心構えや医療制度、栄養アセスメント・栄養ケア計画、栄養補給方法を学ぶ。臨床栄養学Ⅲ、Ⅳにおいては、

各疾病別の栄養療法(病態栄養療法)を学ぶ、というようにおおまかに区別している。

しかし、臨床の現場つまり医療現場において、これらは区別することはなく管理栄養士の日常業務として行われている。そのため、この臨床栄養学実習Ⅱでは、春学期に学ぶ臨床栄養学実習Ⅰに引き続き、基礎栄養学、解剖生理学、食品学、食品機能など今までに修得したすべての学問を基礎に臨床栄養学の理論・食事療法論に基づき、治療効果を高める食事形態、食品の選択、調理の工夫などを加味し、治療食の献立作成、調理実習を行う。また、医療現場で管理栄養士が関わる機会の多い疾患を想定し、NSTも視野に入れ、栄養管理、栄養アセスメント、栄養教育(個人・集団栄養指導)についての模擬体験を通して学ぶこと、そして、医療現場における管理栄養士としてのスキルを少しでも身につけることを軸として講義を組んでいる。

臨床栄養学実習Ⅱは3回生の秋学期のため、ほとんどの学生が臨地実習を終えており、その実体験を生かすということも、臨床栄養学実習Ⅰとはまた違うスタンスで学生が臨んでいると考えている。また、患者様と触れ合ったという実体験を踏まえて、学生が自ら集団栄養指導を臨床現場と同様に企画、実施することをこの講義の最終目標と考えている。そのため、今回の研究授業において実施したように、診療報酬で定められたとおりに(管理栄養士が40分以上、15人以内の対象者に実施する)実施するために、学生自ら

が疾病に関する資料・パワーポイント作成、参加者の動機を高めるための試食やゲーム、カードバイキング、サツとシステムなどを考慮したプログラムを考え、班で協力・実施する。

実施に関しては、本番と同様に指導する学生以外約15名を患者様役とし、対象となる患者様役に徹して参加・質問・批評するようにしている。学生の自主性を尊重しているので間違った方向に行かないようにだけアドバイスし、多くは口出さないよう心がけてはいる。

今回は研究授業でビデオ撮りしたが、学生には集団栄養指導のイメージをビデオで大まかに捉えてもらって、自分たちのプログラム作成の参考にしてもらうために、講義中で実施した集団栄養指導をビデオ撮りして、次年度の学生の参考としている。レポートの感想では、ビデオ撮りと人前で話すということでドキドキしたという学生が多いが、医療現場では人前で話すことが多々求められるので、苦手な学生にもこういった模擬体験は大切だと考えている。



「構造力学Ⅰ」

人間環境デザイン学科 三井田 康記

建築物に必要な要件は、次の3つであると言われます。「用」…住宅や事務所など、用途をもち、役に立つこと。「強」…強く、地震や台風から人や財産を守れること。「美」…美しいこと。

構造力学Ⅰは、その中の「強」にかかわる、建築構造力学の基礎となる静定構造物に力が働いた時、どのような力が伝わっていくのかを学ぶ授業です。1回生を対象に、強い構造を合理的に設計するうえで必要な基本的な知識を学ぶ授業です。力学というと、高校時代に物理を履修していないと理解できないと思われがちですが、決してそんなに難しくはありません。中学校程度の数学や物理が理解できていれば十分理解できる内容です。確かに、高校



時代に物理を履修している学生と、していない学生では、この授業の当初の理解には差があります。しかし、建築の構造力学は高校の物理の中の力学とは違いますから、力の基本が理解できさえすれば、高校時代の履修科目には影響なく、理解できるはずですが、にもかかわらず、学生たちは「構造力学は難しい」という先入観を持って授業に臨みます。そこで、この授業では、ほぼ毎回、学んだことを授業の終わりに小テストや宿題で確認するようにしています。

研究授業は14回目の講義で、テーマは静定ラーメン(門型架構)に外力が加わった時に各部材の中をどのような応力が流れるのかを解くというものです。まとめの意味合いがあるため、授業の初めに小テストを行い、自分で解ける者には自習をさせ、問題が理解できないという学生だけを教室の前に集めて、当初の小テストから解説をするようにしました。約半数の学生が理解できないという事実、いつもながら、自分の力のなさを痛感します。毎回の小テストを積み重ねると無理なく解けるはずですが、学生個々の理解には大きな差が出てきます。小人数を対象にすると理解するまで繰り返すことができるのですが、理解力に個人差があると、どのように伝えるのが効果的なのかとまどい、試行錯誤する状態です。建築は難しくないと、基本がわかれば構造力学も楽しいと思える授業を心がけたいと思っています。

「教育社会学」

現代教育学科

石川 裕之

本授業は教育学部1回生向けの教員免許選択必修・社会教育主事資格選択科目であり、本年度の受講者は58名である。本授業の目的は、教育や学校が社会においてどのような役割を果たしているかを理解することにある。

研究授業は13回目の授業であり、「階層・学歴・職業(2)ーゆとり教育と学力低下論ー」と題して、近年のゆとり教育や学力低下をめぐる議論の背後にある学力の階層間格差拡大の問題について講義をおこなった。当日はやや内容を詰め込みすぎたのと緊張のために時間配分に失敗してしまったが、コメントシート(後述)の反応をみると、多くの受講者にとってこれまでとは違った社会的な視点からゆとり教育や学力低下の問題について考えるきっかけになったようである。

なお本授業では教員・学生間のコミュニケーション・ツールとして自作のコメントシートを活用している。これはA4の厚紙の両面に15個(授業15回分)の小さな感想欄と氏名・学籍番号欄を設けたものである。毎回授業の初めにコメントシートを配り、授業の最後に5分ほど時間をとってその回の授業で分かったことや疑問に思ったことを書かせ、次の回に教員のコメントをつけて返却している。コメントシートの内容から授業の理解度をみることもでき



るし、もし誤解があればコメントを通して訂正することもできる。また、毎回必ずレスポンスが返ってくることも受講者のモチベーションを高めているように感じる。15回分のコメントを1つのシートに書くことになるので代筆も不可能である。

実はこのコメントシートは、私語やいわゆる「ピ逃げ」に悩まされた昨年の授業の反省から導入したものである。コメントシートの導入によって授業への集中度が上がったように感じるし、私語や「ピ逃げ」も目にみえて減った(もちろんコメントシート以外の要素の影響もあるだろうが)。しかしこの方式にも問題がある。毎回全員分のコメントをつけるのに膨大な時間と労力がかかるのである。現在58名分のシートをチェックするのに2時間ほどかかっている。これ以上人数が増えると毎回全員にコメントを返すのは難しくなるだろう。コメントシートのメリットを活かしつつ、いかに省エネ化を図るかが今後の課題である。

ご利用ください!!

情報センターの一角に教材編集ラボがあります。本学で最高レベルのスペックのパソコンを設置し、画像、動画編集をはじめ、教材編集に必要なソフトウェアを搭載しています。ご利用いただくときは、内線にて、情報センターに利用可能かどうかをご確認ください。



MAC も使えます!

主なソフトウェア・・・

マイクロソフトオフィスとアドビマスターコレクションです。マスターコレクションに入っている主なアプリは以下の内容です。

Adobe Acrobat Pro	PDF ファイルの作成・編集
Dreamweaver	高機能なホームページ作成
Adobe Encore	DVD の製作
Adobe Fireworks	Web 向けの画像作成・出力
Adobe Flash Professional	Web コンテンツ、動画作成
Adobe Illustrator	デザインやグラフィックの作成
Adobe InDesign	DTP ソフトウェア
Adobe Photoshop	写真や画像などの編集
Adobe Premiere Pro	動画の編集、出力

お詫び 編集体制の確立が遅れ、本 NEWS の報告が遅2ヶ年度にわたるものとなったことをお詫びいたします。(事務局)